～黒潮町から全国へ～ 3

「集落福祉」でいこう

日本福祉大学　小國　和子

昨年10月の「集落福祉から考える中山間地セミナー」報告・最終回です。

◆34mが「地域」に向き合う原動力に

庭先集荷の取り組みから、中山間地域での「集落福祉」を考えはじめたころ、津波の高さ予測数値が全国紙の一面に踊り、「防災」が町全体の喫緊の課題となりました。

課題は山積みで、関係者の日々の奮闘には本当に頭が下がります。ただその一方で、沿岸部からはじまった網羅的な地域防災の動きは、「部門別支援の発想」の壁を乗り越え、より包括的に「地域で生きる」ことを考える長期的な視点を多くの人と共有する土台を与えてくれました。自分が暮らす土地はどんな特徴を持ち、日々の営みがいかなる資源になり得るのか―。これまで以上に意識するようになったのではないでしょうか。

◆条件不利地域から「町の備蓄庫」へ

庭先集荷も、あったかふれあいセンター&集落活動センターも、短期的な防災活動には含まれません。でも「山側」「平場」双方の特性を生かし、日頃から町の中でモノ・人・情報が行き交う複数の仕組みを整えておくことは、地域の持続性、つまりは長期的な防災力を高める試みとなるのではないでしょうか。市場経済では「取るに足らない」規模の「売るほどでもない」生産物も、各集落で1人でも多くの住民が息長く自律的な生産活動を続けられること自体のありがたみを実感できれば、庭先集荷のような試みがいかに大切か、改めて気付かされます。

◆日常を支え「地域を続ける」

人口減少が進み、中山間地域対象の事業は、単体としては「採算性の壁」にぶつかり続けています。これまでにお話しした「サービス・支援人材の多機能化」は、そんな現実のもとで暮らしを支える手立ての一つ。そして「防災」課題は、部門別の取り組みを、「地域を続ける」という共通の思いへと導く舞台装置のようです。

既存の小さな試みをつなぎ、見方を変えることで何ができるのか。「集落福祉」をカギに考えていきたいと思います。町での次なる出会いを心から楽しみにしています。

（おわり）

ぐっち協力隊がゆく！

地域おこし協力隊・田口佳子
☎43−3306（旧馬荷小学校）

まだまだ寒さが厳しく春の訪れが待ち遠しいですが、皆さんはお変わりないですか？

1月13日、旧馬荷小学校で「幡多地域ふるさと応援隊等ネットワーク設立総会及び第1回会議」が行われました。幡多地域6市町村のふるさと応援隊（地域おこし協力隊・集落支援員）と移住相談員が集まり、抱えている共通した課題について、連携、協力し情報共有や意見交換を行うことで、効率的な課題解決を図ることが目的です。

現在、幡多地区にはふるさと応援隊が21人もいます。せっかくなら、幡多地区だけのネットワークがあってもいいのでは!ということで、第1回会議を馬荷でさせていただきました。

話をしてみると、やはり同じような課題に直面していて、市町村を超え先輩からのアドバイスをもらえたり、後輩から新しい提案があったりと、とても良い会になったと思います。

これからもどんどん開催し、幡多地域全体が盛り上がっていけばと思っています。

幡多6市町村の地域おこし協力隊員や県市町村職員ら35人が集まり、ざっくばらんに意見交換しました。